

私にとっての五時通信

一九八三年十月二十日の朝日新聞夕刊に「われら遊々学々」毎月十日の生活伝えて九十六号と題して五時通信の紹介記事が載りました。いま薄茶色に変色した切抜きを読み返してみると、こんな風に余暇を過ごしている、という具合の、様々なグループを紹介する連載のひとつだったようです。

この記事を読んで直ぐに、まだ練馬区の谷原に住んでおられた神田さん宛に入会をお願いをしたのですが、一体どんな風の手紙を書いたのだったかは忘れましたが、「暇潰し発見」とか、格好のレジャーの過ごし方見つけた「などという気持ちではなかったのは確かです。暇を持て余しているどころか、いたずらな繁忙の中で自分の「生」が指の間からこぼれ落ちて往くような日々を、何か書くことで掴み直したいと考えていたのではないでしょうか。

自分独りしか読者のいない「日記」、あるいは書き手の自分と読み手である知己の二人しか読者のいない「手紙」と違って、たとえミニとはいえ複数の、未知の人が読んでくれる筈の「通信」に何かを書いて、自分を理解して貰う為には、書くのに一種の技巧と緊張が必要です。敢えていえば創作することに近い技巧と緊張が。

自分の通信の読者に十年後の自分だけでなく、現在の未知の誰かを想定するこの緊張感が、のっぺりとした日常に活を入れてくれるような気がします。独り合点かもしれませんが神田さんのいわゆる「自己開示」の意味はこれかもしれないと思ったりもします。

私が本当に「五時通信」に救われたのは、その三年後、一九八六年五月の自分の五十歳の誕生日に、次女を喘息発作で亡くした時でした。娘は十六歳でした。

いくら嘆いても癒されることのない娘との永訣の悲しみ、自分の知識も技術も苦しむ娘には何の役にも立たなかった悔しさ、そして自分の責任で子を死なせた親という状況からは永劫に逃れることが出来ないという、深淵に逆さ吊りされた恐ろしさに堪えることが出来たのは、同じ気持ちの妻と互いに支えあい、古くからの友人に切なさを聴いて貰えたからですが、もうひとつ、私には通信に書くことがとても大きな慰めになりました。

死と太陽をヒトは直視することは出来ないといえます。この時、死は無論自分の死のことでしょう。しかし私には吾が子の死に比べれば自分の死など何ほどのものでもないように思われます。生臭さ坊主の説教でよく聴かされる警句によれば、自分の死は未だ到来し

ていない、そしてそれが来た時それを知る自分は既に存在しない、だからいずれにせよ自分の死なるものは存在しないのだそうですが、そういつて嘯いて居られるのもそれが自分の死だからです。吾が子の死は違います。我が罪は我が前に敵としてあるのです。まったく不条理ですが、私は突然、髪を掴んでその場に引き据えられており、自分の死などよりもっと怖ろしい事実を凝視し続けざるを得なくなりました。

当時、愚痴にも等しい私の通信を読んでくださって、数人の方が直接お便りを下さいました。また誌上で言及しても頂きました。まこと、生涯忘れ得ない慰めでした。貴重なスペースを私して申し訳ありませんが、今、謹んでお礼申し上げます。

いま、私は書くことで救われたなどと偉そうなことを申しましたが、本当はそうではなくて、うちも無い私の繰り言に目を留めてくださり、破綻しかかった私の感情を見かねて慰撫に努めて下さった方々に救って頂いたのです。共感を持って話しかけて下さる方があり、自分は孤独ではないと感ずることで私は救れたのです。有り難いことです。

もしも私の通信が誰からも相手にされず、黙殺されていたとしたらと考えると、とても怖ろしい気がします。

あの非常時に書く場を与えられていたことは、私にとって不幸中の幸いでしたが、最も幸運であったことは「五時通信」に集う方々が他人の不幸を黙って見過ごすことの出来ない、畏敬すべき方々であったことでした。有難うございました。

それで「これからの五時通信」への期待と提言は、というアンケートの第二問への回答は、私の場合、「これからも五時通信」であって欲しいということに尽きます。

ただし、今まで以上に村民同士の対話が欲しい、誰かの発言に対する反響が次号には載るといふ風であって欲しいとは思いますが、村民が「交感の拒否と不能」に陥りつつあるのではないかというのは神田村長さんの杞憂であって欲しいのです。以前、渡辺さんが伊藤さんと合評を、そして今度、大坪さんと往復書簡を試みておられます。素敵な企画だと思えます。自分のことを棚に上げて恐縮ですが、通信を送る私達ひとりひとりがタコソボに入っているような具合で、村民相互の対話が誌上で飛び交うという風にならないのに業を煮やした渡辺さん達が、突破口を開くべく仕掛けを工夫しておられるのではないかと考えました。大賛成です。今後困難があってもどうか続けて頂きたいと願っています。共感も反感も表明しようのない、単なる叙景、叙事、リクツが対話の発生を妨げているのではないかと、私も大いに自戒します。